ヒューマン・ケア研究　第19巻　第2号
2019年3月　152-157頁

Journal of Human Care Studies Vol.19 No.2
March 2019, pp 152-157

追悼記事

岡堂哲雄先生を偲んで

日本ヒューマン・ケア心理学会
常任理事会

多くの会員の皆様がご存知のことと存じますが、本学会の生みの親ともいえます岡堂哲雄先生が、2018年6月23日にお亡くなりになられました。86歳でした。ご命日は奇しくも第20回の学術大会が京都橘大学で開催された日でした。学会が成人を迎えたのをお見届けになり、旅立たれたのではないかと存じます。この記事では岡堂先生が本誌創刊号（2000年10月発行）に書いてくださった「創刊のことば」を再掲し岡堂先生の本学会への想いを噛みしめつつ、縁のある先生方からのおことばをご紹介いたしたいと存じます。改めて岡堂哲雄先生のご功労に深謝しますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

【ご略歴】

1954年　東北大学文学部卒業
1955年　東北大学文学研究科退学
1955年～　家庭裁判所調査官
1966年～　聖路加看護大学講師（後に教授）
1979年～　文教大学教授
2002年～　聖徳大学教授

【主な役員】

文部省学術審議会専門委員
日本学術会議心理学研究連絡委員会委員
日本心理学会第3部門代議員
日本家族心理学会理事長
日本保健医療行動科学会理事
日本ストレス学会評議員
日本精神衛生学会顧問
国際家族療法学会理事
国際家族心理学会会長

【本学会でのご役職】

1999年～　会長（2008年まで）
2008年～　顧問

【ご著書】

『患者ケアの臨床心理（1975）』『看護・介護・保育の心理学シリーズ（2011）』など多数。

注：創刊号の巻頭言の再掲記事です

創刊のことば

日本ヒューマン・ケア心理学会
会　長　　岡堂　哲雄

創立の趣旨と経過

日本ヒューマン・ケア心理学会は、次に述べる趣旨にそって1999年5月1日に創立された。

現代社会は高度情報化が進捗し、物質的な繁栄のなかで人間関係の絆が揺らぎ、さまざまな心身の問題に直面している。少子化、高齢化が急速に進むわが国では、病者の看護や障害をもつ人の介護への社会的関心が一段と強くなり、人間関係的な営みである看護・介護への心理学的支援に対する社会的要請もまた高まりつつある。

ヒューマン・ケア心理学は、「看護、介護、世話などのヒューマン・ケアにかかわる諸現象を心理学的取り組みによって解明し、人間の健康及び福祉の向上を支援すること」を理念とする心理学の新しい領域である。人間は生活体システムであるとの視点に立ち、身体と心、病気と健康といった二項対立的な取り組みを克服し、それぞれがシステムを構成する要素であり、それらの相互関連性に注目するとともに、統合体としての人間へのケアを重くみるのが、ヒューマン・ケアの理念である。この理念の達成には、これまで基礎実験系から応用臨床系にいたる心理学諸分野において、それぞれ分科的に人間の行動や心の問題に取り組まれてきたが、今や諸分野の研究業績を統合し、ケアのための総合的なアプローチに踏み出すべき時が到来したように思われる。

顧みると、看護心理学研究会の呼びかけにより、看護教育にかかわる心理学者の最初の集まりが、1996年9月12日（日本心理学会第60回大会）に立教大学で開かれた。そこでの討論の経緯にそって、看護にかかわる心理学の現状への理解を深め、将来を展望するには、研究者の相互交流の場が必要であるとの認識に基づき、学会創設に向けてオープンな討論を続けることになった。

「看護心理学の問題と展望」という論邁のラウンドテーブル・ディスカッションが、日本心理学会の第61回大会（関西学院大学、1997年9月）及び第62回大会（東京学芸大学、1998年10月）において開かれ、生理心理・認知心理・社会心理・臨床心理等の心理学領域の諸分野において活躍されている研究者、実践家の方々が、多数参集された。看護はもとより介護や世話などのヒューマン・ケアに関する心理学的研究・実践について相互交流と情報交換等の場を設定する必要性が、ますます痛感された。

心理学は、これまでも看護、介護、世話などのヒューマン・ケアの諸分野でそれぞれ相応の寄与をしてきたが、この度従来からの個々の活動を総合するとともに、心理学の諸領域、各分野における人間、行動及び人間関係に関する学術的・実践的知見を結集することによって、ヒューマン・ケア心理学の理論的、実践的な進展を促すべく、日本ヒューマン・ケア心理学会を創設することになったのである。

機関誌・広報紙の創刊

機関誌「ヒューマン・ケア研究（Journal of Human Care Studies）」は、原著論文・報告論文・展望・書評等から構成され、本誌はその創刊号である。編集者は、大阪教育大学の上野矗教授である。

ヒューマン・ケアに関する会員相互の情報の交

換を目指して、広報紙「HCニューズレター」第1号が創刊され3月に発行された。編集者は、筑波大学心理学系の小玉正博教授である。

今後当分の間、毎年春に広報紙「HCニューズレター」を、秋には機関誌「ヒューマン・ケア研究」を発行する計画なので、会員諸氏の投稿による積極的な参加を期待したい。

学術集会の開催

1999年10月30日（土）に、聖路加看護大学講堂において創立総会・記念シンポジウムが150名を超える参加者のもとで開催された。大会委員長は、聖路加看護大学の木村登紀子教授であった。主なプログラムは、創立記念講演「ケアのサイエンスとアート」及び記念シンポジウム「ヒューマン・ケアにおける心理学の役割と意義～基礎研究と実践活動の統合を目指して～」である。記念講演は、聖路加看護大学の日野原重明名誉学長を講師に迎え、ヒューマン・ケアの本質についての洞察が示された。シンポジウムでは、生理心理学・認知心理学・高齢者心理学・医療人類学それぞれの専門家による今日的な話題が提供され、討論が進められた。記念講演・シンポジウムで発表された論文は、機関誌創刊号である本誌に収録されている。

第2回大会は、2000年10月21日（土）・22日（日）に、岐阜大学において小山田隆明教授（大会委員長）のリーダーシップのもとに、QOLに関するシンポジウム、公開講演「家族心理学研究の課題と成果～これからの家族機能の変化への村応のために～」、及び口頭研究発表会が行われる予定である。2001年の第3回大会は、東京都立保健科学大学での開催に向けて準備がスタートしたところである。

研修会の展開

ヒューマン・ケアに関する理論的実際的な取り組みにかかわる研修会を実施する方針に基づき、東京都立保健科学大学の長田久雄教授を中心に企画等について検討している。

入会資格等

当初は修士号を有しヒューマン・ケアの研究・実践にかかわる者（正会員）のみとしていたが、学会の内外からの要請により学士号を有し看護婦・保健婦・助産婦・社会福祉士・精神保健福祉士・保育士などとして登録されている方々を一般会員として受け入れることにしている。入会に関する情報は、本学会事務局から得ることができる。

明日への展望

日本ヒューマン・ケア心理学会では、ヒューマン・ケアにかかわる学術研究・実践研修等の集会、機関誌の発行等の活動を通じて、各分野の研究者・教育者・実践家の学術交流、情報交換、連携等を強化することによって、社会的要請に応えることを目指している。

この新しい領域「ヒューマン・ケア心理学」に関心のある研究者・教育者・実践家の方々が参集され、日本ヒューマン・ケア心理学会の発展に貢献されることを期待したい。

ようやく立ち上げた本学会において、ヒューマン・ケアに関する心理学的アプローチを推し進めながら、将来ヒューマン・ケアにかかわるすべての領域の専門家が結集され、いっそう総合的な学会へと展開されることを切望する次第である。

2000（平成12）年7月23日

学会の胎動期

埼玉学園大学教授
日本ヒューマン・ケア心理学会前会長
小玉　正博

この度、初代ヒューマン・ケア心理学会長の岡堂先生の訃報に接して、心よりお悔やみ申し上げるともに、本学会設立と運営にあたって強力なリーダーシップを発揮された先生との思い出をご紹介したいと思います。温故知新。学会の皆様にとって、本学会がどのような軌跡をたどってきたかを知る一端になれば幸いです。

岡堂先生に直接お目にかかったのは、1996年立教大学で開催された日本心理学会第60回大会の最終日に、正式なタイトルは忘れてしまいましたが、看護系大学で心理学を教えている方々の集うラウンドテーブルをのぞいたことがきっかけでした。その当時、私は日本赤十字看護大学に勤務しており、「看護における心理学教育と研究の意義とは何だろうか」など、心理学徒としてのアイデンティティ危機にあり、方向性を迷っていた時期でした。今思えば、ラウンドテーブルの末席にいて皆さんの話を聞いていれば、多少はヒントが得られるのかな、というようなぼんやりした意識でした。これは私の勝手な解釈ですが、参加されていた他の皆さんも少なからず看護系大学で孤軍奮闘していたのではないかと思っています。そんな中で、岡堂先生は穏やかな中にも看護における心理学研究の発展と意義を我々に力強く述べられていたことを記憶しております。「一緒に勉強していきませんか?」という岡堂先生からのお誘いもあり、特に断る理由もなかったので、そのまま側でうろうろしていましたが、2001年筑波大学で開催された日本心理学会第65回まで看護心理学をテーマにしたラウンドテーブルを4回開催したと思います。

この間、現学会常任理事の木村登紀子先生、同理事で桜美林大学副学長の長田久夫先生、大阪教育大学名誉教授・本学会名誉会員の上野矗先生、福島県立医科大学名誉教授の志賀令明先生、東北大学名誉教授岩崎祥一先生といった蒼々たる先生方と懇意にさせていただいたお陰で、看護という事象の奥深さと職業としての複雑さについてわずかながらに触れることができました。その後、先生方と一緒にお茶の水の喫茶店で何度となく会合を重ね、この集団を核にして「看護心理学会」を設立したいという熱い思いが岡堂先生から語られました。今振り返ると、岡堂先生は、「看護心理学」を確固たる領域として確立したいという思いがあったのではないかと拝察するのですが、私は不遜にも看護心理学では概念として狭いのではないか、また看護プロパーの方々の反応はどうなのか、といった懸念があり、現在の「ヒューマンケア心理学会」に落ち着いたという経緯があります。

また、学会誌を「ヒューマンケア研究」とした理由は、将来的には心理学分野だけでなく、看護や福祉、人間工学など広くケアにかかわる学際領域の研究発表のプラットフォームとして発展させたいという「願い」が込められていたことも付け加えておきます。この「ヒューマンケア」という学会名称について岡堂先生が本当はどうお感じになっていたのか、その御本心を直接伺ってみたいと思いましたが、先生のご存命中にその機会が得られなかったことが悔やまれます。

岡堂哲雄先生を偲んで

日本赤十字看護大学教授
日本ヒューマン・ケア心理学会会長
遠藤　公久

岡堂哲雄先生の突然の訃報に触れ、大変に驚きました。そして、これまでの御功績を思うとき、心から感謝の気持ちで一杯であります。

今からおよそ20年前、先生を中心に、「ヒューマン・ケア心理学」という新しい分野の心理学を開拓すべく、本学会が誕生しました。先生は初代会長として学会の礎を築かれました。

先生を始め、小玉先生や木村先生たち第一世代（このような言い方は適切かわかりませんが）の諸先生たちは、学会創設に向け、何度も何度も熱く議論を交わされたとお聞きしております。看護・介護・福祉などヒューマン・ケアにおける諸現象を心理学的視点から紐解き、理解を深め、新たなアプローチを探索していこうとする、斬新な発想であったかと思います。

創設から20年を経て、先生たちが当初お考えになられたことが、どの程度達成できているのか、常に考えさせられております。

わが国は今後ますます少子高齢化時代を迎えます。“豊かな長寿社会”を目指していくためには、当然のことながら看護・介護・福祉に関わる多職種がともに連携し合い、ケアの充実に向け結集していく必要があります。日本ヒューマン・ケア心理学会が、こういった時代の趨勢に対して、どのような貢献できるのかさらに積極的に提言していくことが求められるでしょう。

そして私個人にとっても、もう一度岡堂先生の教えの原点に立ち返り、襟を正して自分に向き合い、歩を進めていきたいと考えます。岡堂先生、長い間ありがとうございました

在りし日の岡堂哲雄先生（御遺族よりご提供いただきました）

先生！有難うございました

聖路加国際大学名誉教授
いちかわ野の花心理臨床研究所
木村 登紀子

岡堂先生の訃報に接したのは、2018年6月24日京都橘大学で開催された日本ヒューマン・ケア心理学会第20回大会の帰路、新幹線京都駅にて、メールチェックをしたときでした。臥せっておられるとは伺っていましたが、まさか、そんな…、と信じ難い想いでした。今、思えば、学会創立の父のような存在として、ある時には牽引力になり、また他の時には、慈愛のまなざしで見守ってくださった岡堂先生は、20回大会の記念すべき日を待ち、見届けるかのようにして、あの世に召されたのかもしれません。

岡堂先生は、日本ヒューマン・ケア心理学会の文字通りの生みの親と言えると思います。本学会成立には、日本心理学会の年次大会における、1996年の岡堂先生の呼びかけによる自主企画とその後の「看護心理学の課題と展望」に参集した同好の士に端を発することは、本誌15周年記念特集号においても述べられています。これらの黎明期を経て、1999年には創立宣言と創立大会、第5回大会では、岡堂先生が自ら大会委員長を務められ、10周年には、会長職を辞して小玉正博先生に後を託されました。

1990年代後半に岡堂先生が積極的に監修をされた出版物の中には、看護のための心理学シリーズがあります。また、他方で、1970年代に、岡堂先生が心理学の専任教員として関わられていた聖路加看護（現・国際）大学では、当時日本には未だなかった「看護学専攻の修士課程」の設置の準備があり、1980年に実現しました。大学院の科目には、「看護心理学」があり、岡堂先生の後任として入職した私も、20年余を担当させていただき、現在も引き継がれています。

岡堂先生には、看護心理学という領域に力を注がれ市民権をもたせようというお計らいもあったと思います。先に述べたような経緯もあり、学会の名称は、ほとんど「看護心理学会」になろうとしていた創立宣言のわずか1か月前に、創設の準備をしていた我々が、学会の名前を「ヒューマン・ケア心理学会」にしたいと言い出したのです。

岡堂先生は、意外な展開に驚かれたように私には感じられましたが、いつものように我々若者？の希望を尊重してくださいました。

そして、創立の翌年、2000年には、自らの監修で、現代のエスプリの別冊「ヒューマン・ケア心理学シリーズ」としての3部作を世に送り、本誌の創刊号には、現代の社会状況の分析とともに、看護・介護・世話などのヒューマン・ケアの諸分野への心理学的研究・実践と関連領域の相互交流の必要性について述べておられます。

このところ本学会の創設期からそれぞれ理事・監事の任を務められた飯田澄美子先生、藤澤伸介先生も鬼籍に入られました。20年という時の流れを感じ、先生方に導いていただいた数々のことに感謝いたします。

特に、岡堂先生には30歳代から今日まで公私にわたりお世話になりました。改めて、先生とご遺族の皆さま方に、心からの哀悼と感謝を申し上げ、慎んでご冥福をお祈りいたします。